新響
アマチュアオーケストラ

新交響楽団

第85回演奏会

芥川也寸志
交響三章

Yasushi Akutagawa
Torinita Sinfonica

I "Capriccio" Allegro
II "Ninnerella" Andante
III "Finale" Allegro vivace

チャイコフスキー
交響曲第6番　ロ短調
「悲愴」作品74

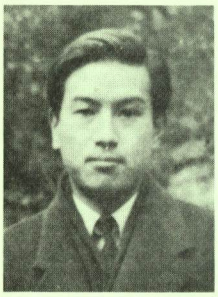
P. I. Tchaikovsky
Symphony No. 7 in h-minor
"Pthetic" op. 74

I Adagio-Allegro non troppo
II Allegro con grazia
III Allegro molto vivace
IV "Finale" Adagio lamentoso

指揮
芥川也寸志

1979年8月4日〈土〉7時
東京文化会館

芥川也寸志　交響三章


東京音楽学校卒業当時

「交響三章」 Trinita Sinfonica は，芥川也寸志が作曲家として最初に世に問うた交響的作品である。これは，彼が東京音楽学校の研究科に籍を置いて伊福部昭に師事している時，1948年に作曲され，同年ＮＨＫ放送を通じ，作曲者指揮，東京フィルハーモニー交響楽団の演奏で放送初演された。その後舞台では，尾高尚忠指揮の日本交響楽団（後のＮＨＫ交響楽団）定期演奏会で初演されている。その頃作曲者は23才という若さであったが，既に並々ならぬ才能の持主であることを証明したばかりでなく，芥川の原始主義と律動主義がこの作品から明確に打ち出されたことを注目すべきである。そういった傾向はその後或程度の変化を来たしたとはいえ，常に彼の背骨を流れて，今なおもち続けられている。

1.カプリチオとなづけられたアレグロ，$\frac{3}{4}$拍子の第一楽章はこの作品の中でも芥川の面貌を最もよく伝えた楽章である。

彼がオーケストラの中で木管楽器を愛好する作曲家であることは，この作品の冒頭から全般を通じて想像することができる。先ずファゴットのソロが歯切れのよい８分音符，ラ・ミ・ラ・ミのリズムで誘導すると，それにのせられてクラリネットが直ちに14小節の長さにわたる見事な主題を呈示する。この主題は次いでクラリネットに，又フルートに，高弦楽器にと受けつがれてひと通り終ると，全オーケストラが打楽器の如く化して，糾合するように強烈なリズムを奏する。その後は複雑な展開が行なわれ，時には$\frac{3}{4}$，$\frac{3}{8}$，$\frac{3}{4}$，$\frac{3}{8}$，$\frac{3}{4}$，$\frac{3}{4}$，$\frac{3}{4}$といった不規則なリズムが現われたりするが，結局は最初の主題を中心としたやりとりが作曲者の巧みな手腕によって飽かせずに続けられるのである。

2.ニンネレラ（子守唄）となづけられたアンダンテ，$\frac{4}{4}$拍子の第２楽章は，３部形式に作られている。冒頭からファゴットが６小節牧歌的な物悲しい主題を吹くと，それは転調されて，クラリネット，フルートとふくらみをもちながら受けつがれ，又弦楽器，ホルン，弦楽器群と幾分の変型をともないながら進行してゆく。するとやがてオーボエのソロが実に哀愁をおびた第２主題を呈示する。これは又いろいろな楽器でやりとりされるが，弦が主となった時に感情が頂点となって盛り上る。その後又ファゴットで再現する第１主題が，色々な楽器に分担されながら終ってゆく。

3.フィナーレはアレグロ，$\frac{4}{4}$拍子で，ロンド形式に近い楽章である。殆どフル・オーケストラが鳴りながら，全体的に祭典的なにぎやかさで演奏される。第１主題は，のびやかな２小節の動機であるが中間部から弦楽器の特徴あるリズミックな第２主題が出現する。

チャイコフスキー
交響曲第６番　ロ短調
「悲愴」作品74



交響曲第６番は，有名な「悲愴」交響曲，いまさらここで中途半端な解説などつけ加える必要もあるまい。「悲愴」の名は弟モデストのヒントにもとづいて，作曲者自身がつけたものだが，ある人の問いに答えて，かれは「標題はもちろんあるが，いまは人にはいいたくないのだ。」と述べたといわれている。この題名や，なんとなく謎めいた神秘な感じなどが，初演の日から間もない時期におきたかれの死にまつわって，いろいろの臆測を生んだ交響曲である。

彼の４番以後の３曲の交響曲は，なんらかの意味で，はっきりとプログラムをもった標題交響曲であるが，私たちは，必要以上にその標題にこだわってはなるまい。いやむしろ，構成的に意志的な造形性が弱いとまで批判されるかれのシンフォ

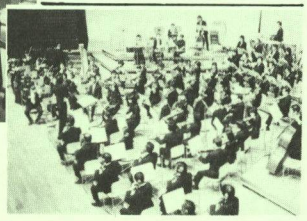
ニーではあるが，当時のロシアの人びとの心情に共感をおぼえたチャイコフスキーの“感情のリアリズム”のうえに立って，情緒的内容の豊かさを物語る“ロシア的シンフォニズム”を確立させたものとして，力強い説得力をもった音楽それ自体の曲の運びにこそ，私たちは，とくに心をくばって聞きいるべきであろう。

音楽をもりあげてゆくその運び方のうまさ，“原色的”といわれるオーケストレーションの効果，肉体的・生理的なリズムの自然さ，率直に訴えかけるメロディーの情緒性——その他，かれの音楽のもつあらゆる性格を総動員して，ロシア社会の矛盾の中に，何かかれには“えたい”が知れぬままに，きびしく迫る厚い壁，すなわち人生の“宿命”をえがきつづけたチャイコフスキーの交響曲は，やはりなんといっても，かれの全作品を代表するもっとも重要なジャンルを形成するものにほかならなかった。



写真・木之下　晃(上)

芥川也寸志と
新交響楽団



新交響楽団は1956年3月創立。会社員，主婦，教師，学生など様々な職業を持つアマチュアのプレーヤー110名程で構成されているオーケストラである。

創立以来，音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに，ソビエト演奏旅行の他，九州沖縄等の国内演奏旅行，ベートーベン・チクルス，ストラビンスキー3部作一挙上演等を行なった。1976年には創立20周年記念演奏会として「日本の交響作品展」と名付けた2夜にわたる演奏会により「芥川也寸志と新交響楽団」は，第8回サントリー音楽賞を受賞。演奏，企画，運営において最高水準のアマチュア・オーケストラをめざしているが，困難な問題を多数かかえている。

維持会員御芳名

阿部愛子
阿部信
飯田菊子
池澤卓治
石井芳延
石田賀代子
伊藤正子
植田昂
内山博
宇野裕
榎本桃枝
蛯子貞二
大塚宏二
大塚真
大野健
大野達也
岡田孝
岡村扶三代
奥野龍太郎
恩田宗彦
恩田幸正

樫村明
樫村彩子
加藤真吾
加藤真理
河口政之助
川崎春子
熊田辰展
小粥保英
児玉達夫
近藤裕昭

斉藤紀子
斉藤仁丸
斉藤日丸
三枝真知子
笹岡義正
柴田栄一
柴田紀之

柴田美知子
島田亙
菅浪正雄
世良俊輔

田上譲
田中誠
谷貝義夫
遠山隆夫
栃谷史朗
栃谷智子

永井一郎
中野〻久子
中村明雄
中村和子
中村紅子
中村凌子
ノガワトシコ
野本由紀夫

長谷川静香
畑良一
日比一
平部やよい
藤口佐和子
堀田昭子

松本明
松本光正
森武

柳下哲
山内喜代志
山内るみ子
山崎きみ子
山本義彦

脇田隆

1979.7.20 現在